慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	辞典を舞台にした商業論争 : 『商業総合辞典』と『百科全書』の諸版本を比較して
Sub Title	Polémique commerciale dans des dictionnaires au dix-huitième siècle : Comparaison entre des éditions de l'Encyclopédie et du Dictionnaire universel de commerce
Author	小嶋, 竜寿(Kojima, Ryuji)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.67 (2018. 10) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	本論では18世紀に盛んに論じられるようになっていた商業について, 当該領域におけるヨーロッパ初の専門辞典である『商業総合辞典』の項目「商業commerce」はいかに受容されたのか, 『百科全書』の系譜と, 2つの版本群(パリ, ジュネーヴ＝コペンハーゲン)からなる『商業総合辞典』の系譜との比較を中心に, 定義の変化について検討したい。熾烈な競合を繰り広げる辞典刊行を舞台にして, 当時の経済活動に対する意識の変化がいかに醸成されていたのか, そしてそれぞれの辞典がどのようにお互いを利用しあっていたのか明らかになるだろう。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20181031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

辞典を舞台にした商業論争
――『商業総合辞典』と『百科全書』の諸版本を比較して――

小　嶋　竜　寿

要旨：本論では 18 世紀に盛んに論じられるようになっていた商業について、当該領域におけるヨーロッパ初の専門辞典である『商業総合辞典』の項目「商業 commerce」はいかに受容されたのか、『百科全書』の系譜と、2 つの版本群（パリ、ジュネーヴ = コペンハーゲン）からなる『商業総合辞典』の系譜との比較を中心に、定義の変化について検討したい。熾烈な競合を繰り広げる辞典刊行を舞台にして、当時の経済活動に対する意識の変化がいかに醸成されていたのか、そしてそれぞれの辞典がどのようにお互いを利用しあっていたのか明らかになるだろう。

キーワード：『百科全書』、『商業総合辞典』、サヴァリ、フォルボネ、重商主義、重農主義、出版史

1. 経済活動の分類、列挙――18 世紀前半の記述――

1–1. 『商業総合辞典』パリ版の項目「商業」

1723 年、国内外の経済活動を網羅的に扱う『商業総合辞典』がパリのエティエンヌ書店から刊行される。フォリオ判 2 巻および 1730 年に出された同判型の補遺 1 巻をもって初版本を構成する本辞典は、ジャック・サヴァリ・デ・ブリュロン（1657–1716）とその兄ルイ = フィレモン・サヴァリ（1654–1727）によって編纂された。二人は『完全なる商人』の著者ジャック・サヴァリの息子であり、先に着手した弟はルイ 14 世の政権下で 1686 年から関税監察官の任につき、兄はサン = モールの律宗司祭を務めていた。業務上の必要から作成された弟の備忘録を辞典の揺籃とすることから、コル

ベールによって推進された保護貿易をはじめとする重商主義政策の影響を色濃く残していたと推測されよう。物の交換や人との交流など、きわめて簡潔に定義づけされてきた従来の辞典に対して、本辞典を嚆矢として経済活動の具体的な事象が取り扱われるようになった。

本辞典の項目「商業」には、初版と第 2 版以降の版本の間で構成上の異同がある。初版本第 1 巻に収められた項目では、実際に行われている商取引を分類して説明するとともに、世界各地の産業について論じられており、第 1 巻全体の約 4 分の 1 を占める[1)]。しかしあまりに膨大であったためか、1741 年に刊行された版本では世界の経済状況に関する記述部分が分離され、第 1 巻の序文のあとに項目とは別立てで「世界の商業の全体像」として配置される。その結果、初版から残された取引形態についての記述が項目「商業」として立項され、第 2 巻に掲載されるようになった[2)]。

あらたに整理された項目は以下のような定義からはじまる：

> 交換、売買、商取引すなわち商品売買全般のこと。貨幣や手形のみでなされる取引のこと。商業が世界開闢と同じくらい古いのは疑いようがない。必要が商業を生み出し、安楽への欲望が商業を大きくし、強力なものにした。ついには虚飾、奢侈、吝嗇の後押しもあり、おそらくあるべき姿の限度をはるかに超えて、商業は補完されたのである。

奢侈の擁護が認められるとともに、虚飾や吝嗇といったキリスト教倫理では大罪とされていた観念についても商業の繁栄に必要なものとして評価されている。つづいて、経済活動は地理的にも世界中で営まれていると述べ、その人類の普遍的営為の証左として商業史を概観して、「商業とは名誉ある有用な職業である」と経済活動の重要性を指摘して締めくくる。以上の概観のあとで、上記の定義の細目として取引形態を 12 種に分類する。その事項は

1）Jacques Savary des Brûslons, *Dictionnaire universel de commerce*, Paris, 1723, T. 1, p. 830–1331.（以後 *Dic. com.* と表記。）

2）*Dic. com.*, Paris, 1741, T. 2, p. 403–9.

「陸上売買」や「海上売買」などの国外を中心にした商品取引 9 種、「貨幣取引」と「手形取引」の金融取引 2 種、「不安定な売買」という中立的な第 3 国を仲介した敵国との国家間取引、そのほか地名のついた取引について触れて、代表例として「レヴァント売買」など 3 種の名称が挙げられている。生産力に関する議論など当時の問題系に関する理論的見解や態度について、記述の上では判然としない。だが、商人の地位向上が主張されるほか、「貨幣取引」において、「国家にも個人にも貨幣取引ほど有用で便利なものはない」として、のちに重農主義で批判される、貨幣取引によって生じる価値を評価する重商主義的主張が確認できる。

また項目「商業」では、「商隊」、「保険」、「保険組合」、「銀行」、「銀行員」、「高利」、「振り込み」、「投機」、「相場師」に参照指示が出されており、金融と流通の実際の操作に関する項目を関連領域とみなして、重視していたようだ。

以降、パリで刊行された版本（1741、1748）にはこの配置と記述が踏襲されるのだが、後続辞典においてサヴァリの記述はいかに受容されるのだろうか[3)]。

1–2. 18 世紀前半における『商業総合辞典』の影響

具体的な比較に移る前に、辞典刊行をめぐる当時の出版状況を簡潔にまとめておこう。まず学術上の公用語としてのラテン語の衰退と比例して、俗語としての各国語の地位向上の結果、17 世紀後半以降、各国で国語辞典の編纂が急がれるようになった。またルネサンス以降の地理、歴史上の発見にともなう情報量の増加にともない、専門辞典の需要も高まりを見せるように

3）『商業総合辞典』には、パリで刊行された版本群（1723–30、41、48、50）のほかに、ジュネーヴ＝コペンハーゲン版本群（1742、50、59–65）の系譜が存在する。後者において「世界経済の全体像」を含めた増補改訂を確認できるが、『百科全書』パリ版（1751–72）で参照されたのはパリ版本群であるため、本論ではパリ版本群から比較をはじめる。拙論、« Les éditions du Dictionnaire universel de commerce utilisées par les encyclopédistes », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, No. 45, 2011, p. 153–59.

なっていた。つまり、国語・専門を問わず、辞典刊行が隆盛を極めていたのだ[4)]。アントワーヌ・フュルティエールの『総合辞典』(1690）やトマ・コルネイユの『技芸・学問辞典』（1694)、ジョン・ハリスの『レキシコン・テクニクム』（1704）といった技術に特化した専門辞典が陸続と現れるなかで、サヴァリ兄弟は製造業を含む経済活動全般を扱う辞典を編んだ。周囲の勧めを受けつつ[5)]、時流に乗るかたちで辞典を刊行していることからも、当時すでに商業が強い関心を集める対象になっていたことは想像に難くない。大航海時代以降に拡大する国家間の競争下で、軍事と並んで利益獲得が国家政策として重視されるようになり、貨幣経済が浸透していた状況に鑑みれば、もはや経済活動を看過できなくなっていたのも当然だろう[6)]。事実、1765 年にコペンハーゲンで決定稿となる 5 巻本が刊行されるまで、アムステルダム（1726–32)、パリ、ジュネーヴで版を重ねるのみならず、世紀半ば以降にはイギリスなどで翻訳版や模倣辞典が出版されていることからも、『商業総合辞典』が世紀をつうじて好評を博していたといえよう[7)]。

実際に複数の辞典を比較してみると、18 世紀前半、本辞典は項目のコピーという形で後続辞典に受容されていたようだ。例えばピエール・リシュレの『フランス語辞典』の初版本（1680）では、商品の取引や対人間のやりとりといった簡潔な定義が付与されるにとどまっていたが、1732 年の版本では『商業総合辞典』の利用が確認できる。元の記述を残しながらも、サヴァリの辞典における先述の経済活動の分類がほぼすべて挿入されているのだ。つまり、国語辞典の記述に具体的な経済活動が列挙されるようになったのであ

4）Pierre Rétat, « L’âge des dictionnaire », *Histoire de l’édition française*, T. 2, Fayard, 1990, p. 232–45.

5）出版に至る経緯については、以下を参照。*Dic. com.*, « Préface historique », Paris, 1741, T. 1, p. xiv–xxvii.

6）米田昌平、『経済学の起源』、京都大学学術出版会、2016。本書によれば、17 世紀以降、イギリスの影響を受けつつ、フランスでも功利主義的理念が形成されはじめていたという。

7）Jean-Claude Perrot, *Une histoire intellectuelle de l’économie politique*, Edition de l’école des hautes études en sciences sociales, 1992, p. 98–104.

る。以降、この記述は1759年の版本まで変化することなく継承された[8)]。また『百科全書』出版企画の発端になったイーフレイム・チェンバーズの『サイクロペディア』（1728）の項目「商業」では、サヴァリの項目が全面的に翻訳されている[9)]。経済政策や理論ではつねにフランスをリードしていたイギリスだが、イギリス初の近代的な百科事典の項目「商業」は、フランスの辞典が典拠になっていたのである。そして『百科全書』では、項目「商業」の記述こそ『商業総合辞典』と異なり、その利用は認められないものの、項目の属性を示す分類符号 désignant で「商業」と記された、本文全 17 巻で約 2000 に上る項目の 7 割以上がサヴァリの辞典の写しであったこと明らかになっている[10)]。刊行直後しばしの間、『商業総合辞典』で実践された経済事象の分類と列挙は、国語辞典や国内外の百科事典などで批判もなく広く引用されて、項目の記述に変化をもたらしたといえよう[11)]。

8）Pierre Richelet, *Dictionnaire de la langue fransaise ancienne et moderne*, Amsterdam, 1732, T. 1, p. 635b–c.

9）Ephraim Chambers, *Cyclopædia: or, An Universal Dictionary of Arts and Sciences*, London, 1728, T. I, p. 273b–74a. 本文は翻訳だが、項目内で『商業総合辞典』とは異なる『サイクロペディア』独自の参照指示が出されている。また、『百科全書』の編集企画で使用された可能性の高い 1741 年の版本でも、わずか数語の書き換えのほか、記述に大きな変化はない。

10）拙論、« Le Dictionnaire universel de commerce dans l'Encyclopédie »、『「百科全書」・啓蒙研究論集』、2 号、2013、p. 259–71.

11）もちろんすべての辞典に影響を与えたわけではない。『商業総合辞典』を用いずに項目「商業」の書き換えが行われていた事例もある。初版本（1704）で『総合辞典』の項目を用いたと推測される『トレヴー辞典』は、1721 年の版本において、商業の歴史については Pierre-Daniel Huet の *Mémoires sur le commerce des Hollandais*（1718）を、語の用例については François Toubeau の *Les institutes du droit consulaire, ou La jurisprudence des marchands*（1678, 1700）を参照して大幅に加筆したという。以後 1771 年に刊行された最終決定版に至るまで、内容面に大きな変更が加えられることはなかった。一方『総合辞典』は 1727 年刊行された最終版の項目で、今度は『トレヴー辞典』の項目を写している。

2. 列挙から合理へ、重商主義の継承
――『百科全書』の登場と『商業総合辞典』の反応――

2–1. 『百科全書』の項目「商業」

だが、好意的な反応はいつまでも続かなかった。世紀半ばを境にして風向きが徐々に変わりはじめたのだ。1753 年、『百科全書』第 3 巻に項目「商業」が掲載されるが、それはサヴァリの辞典のコピーではなかった[12)]。当該領域に関して、百科全書派たちに頻繁に利用された『商業総合辞典』だが、その軸となる概念については踏襲されなかったことになる。ケネーが投稿したこともあり、ディドロへの影響も含めて重農主義的側面が取り上げられることの多い『百科全書』だが、項目「商業」を執筆したのは重商主義者フランソワ・ヴェロン・ド・フォルボネであった。『商業要論』（1754）の刊行を翌年に控えていたこともあり、本項目はその要旨といえる[13)]。

『商業総合辞典』に示された「商品および金融取引」という実践に即した定義とは異なり、フォルボネは「全般的な意味での相互的コミュニケーションである」と、より抽象的な定義を示す。そして前半部分を商業史の記述に割いて、「商業の歴史はわれわれに 3 つの重要な見解をもたらしてくれる」という：

1. 人々は土地の富の不足分を二次産品で補い、自然の富の所有者よりも金銭的な富を所有するようになった。
2. 企図できるあらゆることを施さなければ、取引で少しずつ損をしてしまう。
3. 大規模な取引には多くの労働人員が欠かせない（中略）人々は快適な生活にもっとも惹かれるのを常とする。

12）*Encyclopédie*, Paris, 1753, T. 3, p. 690a–99b.（以下、*Enc*. と表記。）

13）フォルボネの思想については以下を参照。米田昌平、『欲求と秩序』、昭和堂、2005、p. 150–203。Jean-Yves Grenier, *Histoire de la pensée économique et politique de la France d'Ancien Régime*, Hachette, 2007, p. 184–5.

そして以上の見解から政体における商業の原則を示す：

「農業と製造業を商業の軸とすること」、「商業の目的とは、労働を通じて最大多数の人口に快適さをもたらすこと」、そして「商業の効果とは、政体に能う限りの力をもたらすことである。この力は人々のうちに存在し、政体はそこから富を引き出すのだ」。

さらに詳細に立ち入って論が展開されるのだが、その要点は輸出の拡大とそれにともなう貿易差額の増加といえる。そして交易において価値を生み出すために重視されたのが、取引の相互的なコミュニケーションを可能にするメディアの役割を担う流通機能であった。農業と製造業についても両者が相互的に機能してはじめて政体に寄与すると考えるため、どちらか一方を重視することはない。そして農産物も二次産品もともに流通することによってはじめて商品価値をもつと論じる。また対外貿易での利益を追求するため、国内需要を満たし、その余剰品を輸出に回すために、国内の農産業には自由競争をうながす一方、対外的な交易においては保護貿易擁護の立場をとっている。また、交易によって獲得された貨幣について、最終的には生産資金として循環するという。いずれの点においても重農主義者たちとは異なる見解が認められる。

重商主義的な論客である以上、フォルボネの記述が重農主義陣営と相容れないのも当然だろう。『百科全書』に参加した執筆陣のさまざまな思想的背景をみれば、経済に関する記述が一枚岩であるほうがむしろ難しい。そのためフォルボネの項目とは、『百科全書』における経済思想の多様性を示す一例として把握されるのが妥当だと思われる。だがこうした内部での対立の一方、世紀前半で影響力をもった『商業総合辞典』との関わりについてはどうか。役人として同時代の政策に寄り添ったサヴァリ弟の立場からすると、辞典を準備していた頃の重商主義的な傾向に疑いはない。つまりフォルボネにとってサヴァリ兄弟の辞典の方が『百科全書』で対立するほかの項目よりも親和性を感じ取っていた可能性がある。事実、『百科全書』の項目末尾に、サヴァ

リ父の『完全なる商人』および『商業総合辞典』が参考文献として挙げられており、フォルボネ個人の先行辞典に対する姿勢がうかがえよう。

しかし両辞典の間には相違点も指摘できる。語の定義で確認されたように、経済活動にともなう事象の博学的な収集と分類にとどまった『商業総合辞典』に対して、諸事象の表層の背後で通底する原理を抽出しようとしたフォルボネの方向性は明らかに異なっていた。そしてこの姿勢の違いは商業に関する歴史記述にも反映しているといえる。サヴァリ兄弟の辞典では、商業が人類によって営まれてきた普遍的活動であることの証拠として、つまり事実の列挙として歴史が用いられているのに対して、フォルボネは過去の事象から商業の理論的見解を導き出しそうとしているからだ。先の語彙の定義に示された抽象度の差もこの姿勢の違いから説明できよう。『百科全書』において項目「商業」の記述は列挙から合理へと変化したとみなすことができるのだ。またこの変質は『百科全書』陣営の方針にも当てはまる。『サイクロペディア』の翻訳と増補改訂企画を出発点とした『百科全書』では、サヴァリの項目の翻訳であるチェンバーズの項目が差し替えられることになったが、副題にあるような合理的辞典であるために、事実の列挙にとどまらない理論的な記述を追求した『百科全書』の編者からすれば、『商業総合辞典』の内容に編者が不満をもったとしても不思議ではない。具体的な理由は判然としないものの、チェンバーズの項目に対する評価をつうじて、畢竟その源泉であるサヴァリの項目に否が突きつけられる形になったといえるのである。

以上のように『百科全書』では、『商業総合辞典』の重商主義的性格が引き継がれると同時に、その記述作法に対する批判的側面が確認できる。従来の諸辞典で確認された単なるコピーとは異なり、サヴァリ兄弟の辞典に対して肯定的な側面も残しつつ、批判的な態度が胎動していたのだ。

2–2. 『百科全書』に対する『商業総合辞典』の反応

2–2–1. 『商業総合辞典』ジュネーヴ = コペンハーゲン版本群

『百科全書』は権威側との衝突が相乗効果となり商業的に大成功を収める。のちにタイトルと内容をそのままに、判型の小型化と低価格化によって欧米

規模で伝播するだろう[14]。この成功は模倣辞典の出版を促したのみならず、先に刊行されていた辞典の改訂にも影響を与えた。1759 年から 65 年にかけてコペンハーゲンで刊行された『商業総合辞典』の決定版も例に洩れない。以下、『商業総合辞典』に対する『百科全書』の影響について確認しよう。

『百科全書』のパリ初版本で参照された『商業総合辞典』は、パリのエティエンヌ書店から刊行された版本であった。この版本の系譜は初版から 1750 年にかけて 4 版を重ねており、先にみたように構成面を除き、内容に異同はない[15]。この辞典にはそのほか、初版本から派生して、1742 年からジュネーヴでクラメールとフィリベールによって刊行された版本群が存在する。この版本群の系統では初版本の書き換えが進められ、1750 年版（ジュネーヴ）を経由して、コペンハーゲン版へと至っている。項目「商業」については、『百科全書』刊行以前の 1750 年版で、「交換、売買といった、大口小口双方のあらゆる商品取引における商人の技能」とすでに定義が書き換えられている[16][17]。取引という事象から商業に携わる人間の技術へと変更されているが、その後、従来の記述が続けられており、これだけでは方針に大きな変化はないと思われる。だが増補はそれだけにとどまらなかった。

> 『商業についての政治的試論』の有名な著者であるムロン氏の定義によれば、商業とは必需品に対する余剰品の交易のことをいう。この見識ある作品においては、商業に関する個々の事例ではなく、大地のあらゆ

14）Robert Darnton, *L'Aventure de l'Encyclopédie*, Librairie Académie Perrin, 1982.

15）実際には 1750 年版の記述において改訂が認められるが、それは同年にジュネーヴで刊行された版本と同じである。どちらの版がもう一方の内容を利用したのか判然としないが、『百科全書』との比較に影響がないので、これ以上深入りはしない。

16）1742 年版では、「商業」という項目は存在するが、実際の記述はなく、この版本でもすでにパリ版本群同様に分離されていた「世界の商業の全体像」に参照指示が送られている。

17）*Dic. com.*, Genève, 1750, T. 1, p. 1040–47.

る生産品から得た利益を使って、立法家が国家に安楽をもたらす方法について考察されている。（中略）商業とは、国家の保持はおろか増強にさえ、軍事以上にふさわしいのだ。重要な真実である。

とムロンの主著を援用して定義が補足されている。従来の重商主義的な方針を強化するのみならず、先述の『商業総合辞典』に不足していた政治経済に関する思弁的な記述が付与されたのである。あくまで補足であり、フォルボネのような全面的な論の展開は望めないものの、『百科全書』との比較において欠落していた要素の補塡が増補改訂版において進められていたようだ。そしてこの傾向はコペンハーゲン版に引き継がれた。

2–2–2. コペンハーゲン版『商業総合辞典』の項目「商業」

コペンハーゲン版の項目「商業」は第2巻に収録されている[18]。だがそこには従来からの歴史記述やジュネーヴ版の増補はない。元来の取引形態の分類も後回しにされた。代わりに『百科全書』に寄稿されたフォルボネの記述がほぼ全て挿入され、そのまま定義となっているのだ。そのほか、当時盛んに繰り広げられたコワイエ師による商人貴族論争について触れられるなど、商業の有益性についての主張が散見される。サヴァリ兄弟の元来の記述は、世紀後半まで残されたとはいえ、もはや概念の主要な定義ではなくなっており、コペンハーゲン版本においてその役割を終えたといえよう。『百科全書』側の立場からすれば、他の辞典をつうじて自らの記述が伝播して、影響を及ぼす範囲を広げていたともいえる。いずれにせよ、なぜ『商業総合辞典』は『百科全書』を利用したのだろうか。

コペンハーゲン版第1巻では、序文に続いて「1750年のジュネーヴ版についての所見」が掲載されており、われわれの疑問を解消する手がかりになりそうだ。そこでは、上述のムロンのみならず、ガルサン、プリュシュ、ラバ、ウッドワードらの著作や、パリ王立アカデミーおよびロンドン・ロイヤル・ソサエティの紀要など、さまざまな報告や理論的著作が項目の増補のた

18）*Dic. com.*, Copenhague, 1765, T. 2, p. 105–24.

めに用いられたという[19]。そして第5巻は、パリ版本群の「世界の商業の全体像」に書き換えや増補が施された「世界の商業について」に充てられているが、同巻の編者まえがきには以下のように記されている：

> この第5巻がおもに歴史的なジャンルに属するとしても、哲学者や政府にとって益なしではないと自負している。読者は国家が繁栄するための秘密の原因の一端を目の当たりにするだろう。他国に従属した国が、いかなる法や条例によって富を蓄積したのか、過去の経験を通じて確実で有益な方法を理解できるはずだ[20]。

歴史記述はもはや事実確認のために収集された証拠ではなく、応用可能な方法を抽出するための源泉としてみなされている。このように哲学者の使用にも耐え、国益への助言をも可能にしようとする方針転換は1750年以後のジュネーヴ＝コペンハーゲンの系譜に棹さすものといえ、ジャン＝クロード・ペローの指摘するように、「商人の手引きが控えめながらも政治経済についての概論」になろうとしていたといえよう[21]。そして、『商業総合辞典』の編者は、事実の列挙からの脱却を図るために『百科全書』を利用して、フォルボネの記述を項目の主軸として迎え入れたと考えられるのではないだろうか。合理的辞典としての性質とその反響を踏まえれば、1750年の版本ですでに萌芽が認められた理論的な書物になるための最重要文献として、1751年に刊行がはじまった『ジュルナル・エコノミック』とともに、『百科全書』に白羽の矢が立てられたとしても不思議はない。両書の重要性については、第1巻の「出版社の所見」で述べられているほか[22]、「コペンハーゲンすなわちジュネーヴの編集者たちは、サヴァリの誤謬の修正に資するすべて

19）*Dic. com.*, Copenhague, 1759, T. 1, « AVIS SUR L'EDITION DE GENEVE, DE 1750 », p. xxxv–xxxix.

20）*Dic. com.*, Copenhague, 1765, T. 5, « AVERTISSEMENT DES EDITEURS », NP.

21）Jean-Claude Perrot, *Op. cit.*, p. 102.

22）*Dic. com.*, Copenhague, 1759, T. 1, « AVIS DES LIBRAIRIES », NP.

をおもに『百科全書』から抽出することを予告している[23)]」という記事から、刊行以前からすでに『百科全書』の援用を喧伝していたことがわかる。

このようにしてサヴァリ兄弟の辞典は書き換えと増補により、より一層充実した内容になったが、コペンハーゲン版をもって、フランス語で書かれた同タイトルの辞典の記述更新は最後となった。とはいえ、辞典の影響力が霧消したわけではない。辞典の命脈は、記述の変更よりもむしろイギリスやドイツなど国外での翻訳や模倣辞典の刊行によって保たれ、知見はより一層伝播していたといえる[24)]。また他方では、『百科全書』と関係を結んだ『商業総合辞典』が、影響力の拡大とは異なる局面を迎えていたようだ。

3. 『百科全書』の記述変更と『商業総合辞典』の利用

3–1. 1767 年版『家政辞典』からの批判と出版競争

世紀後半になると、『商業総合辞典』にさまざまな批判が向けられた。例えばノエル・ショメルの『家政辞典』の 1767 年版の項目「商業」では次の記述が認められる：

> サヴァリの辞典がいかに称賛に値するといえども、それ一冊で事足りるなどと思ってはならない。職業柄身につけた知恵や経験はつねに新たな知見をもたらしてくれる。（中略）熟練の商人が少なからぬすばらしい知識を付与してくれることは疑いの余地がない。この点、サヴァリの辞典はいわば歴史家でしかない場合が多い。（中略）サヴァリ辞典にはない多くの重要な事項を新版のこの辞典で目にするだろう[25)]。

リヨンで初版が刊行された 1709 年以来、項目「商業」では、ヨーロッパの経済に関する記述が認められるものの、1723 年以降でも『商業総合辞典』を参照した形跡はない。1741 年の版本を確認したところ、「レヴァント交

23）*Journal Encyclopédique*, 1757, le 1 septembre, p. 138–40.
24）Jean-Claude Perrot, *Op. cit.*, p. 103.
25）*Dictionnaire œconomique*, 1767, Paris, p. 666a–b.

易」に関する記述が付け加えられたのみで、ほかは初版と同じであった。ところが、パリで刊行された 1767 年の版本の記述は大幅に縮小されている。そして従来の記述は削除されて、簡潔な説明が述べられたあと、上記の文言を挿入してサヴァリ兄弟の辞典を批判しているのだ。商業に関する最良の書籍の一つと断りながらも、『商業総合辞典』の内容が古くなっていることを揶揄するのである。「この種の作品は改良されすぎるということもなく、内容を充実させるために新発見が多すぎるということもありあえない[26]」と『ジュルナル・アンシクロペディック』でも述べられているように、新情報の追加が求められる領域だけに、『家政辞典』陣営が自らの差別化を図るため、上記のような指摘をしても不思議ではない。とはいえ、なぜこれまで接点がなかったと思しき辞典を批判しはじめたのか。また、1765 年に増補改訂版が刊行されて間もない状況にもかかわらず、あえて批判をしているのはなぜか。1765 年版の存在を知らなかったのか、あるいは改訂の進まなかったパリ版本群に向けられた批判なのか。こうした推測はいずれも否定される。なぜなら、『家政辞典』の出版社の一つがサヴァリ兄弟の辞典のパリ版本群を刊行したエティエンヌ書店だからである。

コペンハーゲン版『商業総合辞典』第 5 巻には「批判文への返答」という記事が挿入されている。これは『メルキュール・ド・フランス』誌 1763 年 6 月号に掲載された、エティエンヌ書店からジュネーヴ = コペンハーゲン陣営に宛てた、自らの出版允許を主張する抗議に対する返答であった[27]。このことから、エティエンヌ書店はコペンハーゲンで刊行された版本をすでに知っていることは明らかであり、また自らが出版した版本群をわざわざ批判する必然性もきわめて低いといえるだろう。つまり、『家政辞典』の項目で展開した批判は 1763 年の延長線上に位置づけられ、『商業総合辞典』をめぐるパリ陣営とジュネーヴ = コペンハーゲン陣営の対立は『家政辞典』に

26）*Op. cit.*

27）*Dic. com.*, Copenhague, 1765, T. 5, « REPONSE A UNE LETTRE CRITIQUE *contre l'Edition de* COPENHAGUE *du Dictionnaire de Commerce &c.* », NP.

舞台を移して継続していた可能性を指摘できるのだ。そして「来年中には新編の趣意書を出版して、すぐに印刷に取りかかるつもりだ[28)]」といい、両者の間にさらなる禍根が残される。実際のところ、翌 1764 年に『商業総合辞典』が新たに編まれることはなかったが、この予告は、『百科全書』に複数の項目を寄稿していたアンドレ・モルレによる『新編商業総合辞典の趣意書』（1769）に結実する。対立は延長し、サヴァリ兄弟の辞典は『百科全書』と新たな関係を結ぼうとしていた。

3–2. 再び『百科全書』へ――項目の書き換え――

モルレによって起草された趣意書で、新編の意義が次のように述べられている：

> 今日、政治経済学は発展段階に差し掛かったように思われる。かなりの数に上る事実について以前よりもよく知られるようになり、確認されるようになった。慧眼をもってそれらの原因が調査されるようになった結果、実践的な活動範囲は広がり、理論にも磨きがかかった。そうした知見を結集して、一冊の書物のなかに配置すべきときがやってきた[29)]。

辞典はもはや個々の経済活動についての事象を列挙することを目的としたものではなく、比較をつうじて事象間の関係性を明るみに出すことにより、体系的な知識を構築する政治経済辞典になろうとしていることがわかる。これはまさしく『百科全書』および『商業総合辞典』、とりわけジュネーヴ＝コペンハーゲン陣営の辞典が目指してきた流れに沿った方針といえるだろう。1765 年のサヴァリ兄弟の辞典では理論的記述を獲得するために、フォルボネによって執筆された『百科全書』の項目を利用したが、今度は『百科全書』に関与したモルレによって、『商業総合辞典』そのものが体系的な記述

28）*Mercure de France*, 1763, Juin, Paris, p. 103.

29）André Morellet, *Prospectus d’un nouveau dictionnaire de commerce*, 1769, Paris, p. 3.

からなる合理的辞典に生まれ変わろうとしていたのである。

ところが残念なことに新編は刊行されず、サヴァリの辞典が全面的に書き換えられることはなかった。したがってモレリによる項目「商業」は存在せず、従来の項目との比較はできない。だが『商業総合辞典』の項目が合理化することによって別の記述になるとしたら、フォルボネの項目とも異なる可能性は十分にあっただろう。このような可能性が実現したのは、項目の増補や書き換えが進められた『百科全書』の後続版においてであった。ではフォルボネの項目はいかに書き換えられたのか、そして『商業総合辞典』はいかに関与していたのだろうか。

『百科全書』の成功にいち早く反応したのはイタリアのルッカの出版社であった。コペンハーゲン版『商業総合辞典』と同年代に刊行されたこの版本（1759–71）では必要に応じて脚注でコメントが付与されているのだが、項目「商業」にはなんら手を加えていない。その後リヴォルノで刊行された版本（1770–75）についても同様である。

書き換えが確認されるのは、リヴォルノ版と同時期にスイスのイヴェルドンで出版された『百科全書』（1770–80）であった。第 10 巻に掲載された記述はまずフォルボネによる定義からはじまり、歴史記述についても変更はない。だが問題はそのあとである。イヴェルドン版の項目の著者であるド・フェリーチェはフォルボネが導き出した見解をすべて削除して、フォルボネに対する反論を展開したあと、以下のようにまとめている：

> 以上のことから、商業が国家を富ませるとはいかなる意味で理解すべきなのか、はっきりとわかる。つまり、商業はそれ自体で富の増大を国家にもたらすことはない。国家にとっての商業とは、農耕によって国が富を増やせるようになるための手段なのである[30)]。

見出し語の定義はそのままながら、フォルボネの項目で展開される流通上で

30）*Enc.*, Yverdon, 1772, p. 483.

発生した価値の上昇については一切評価せず、農耕による生産性を重視する重農主義的立場に記述がすり替えられているのである。同様にこの傾向は、フォルボネの項目で重要性が謳われた国外取引についても、せいぜいのところ「必要悪である」と一刀両断している点でも認められる。事実、参考文献として、ムロンの『商業に関する政治的試論』に加えて、ルメルシエ・ド・ラ・リヴィエールの『政治社会の自然的・本質的秩序』が挙げられており、理論的な記述作法を踏襲しながら、内容はパリ版の記述を否定する形で更新されているのだ。

そしてイヴェルドン版に続き、1783 年から翌年にかけて刊行された『体系的百科全書』の商業に関する巻においてもまた、フォルボネの項目「商業」の書き換えが認められる。編集を担当したのは重農主義者ニコラ・ボードーであった。第 1 巻の序文のつづいて掲げられた「ボードー師による新商業要綱」というタイトルの序論には、「『体系的百科全書』に向けた、新編サヴァリ辞典の序論に資する[31)]」という副題が銘打たれている。つまり、『百科全書』の後続辞典のシリーズに含まれる本辞典が、サヴァリの後継辞典であると自負しているのだ。ここでふたたび両辞典の系譜は結節点を見出すことになるわけだが、項目は具体的にどのように変更されているのだろうか。まず項目冒頭の定義は『商業総合辞典』パリ版本群と同じままだが、その後で以下のように記述される：

> （中略）なにかしらの商業全体に必要な関係者とは、まず交換するための素材の生産者であり、そして最終的な消費者であると結論づけられる。
>
> （中略）広く蔓延して危険な結果をもたらす誤謬とは、起点としての生産者とその終点にいる消費者をつねに重要かつ本質的な部分として含む正確な意味での商業と、商取引すなわち購買者兼仲買人の取引という

31）原題は以下のとおりである。NOUVEAUX ÉLÉMENS DU COMMERCE, PAR M. L'ABÉE BAUDEAU, *SERVANT de Discours préliminaire à la nouvelle rédaction du Dictionnaire de Savary, pour l'Encyclopédie Méthodique*.

生産者と消費者を含まない、不的確な意味での商業とを混同してしまうことである。

流通に与える低い評価と生産者を重視する姿勢は先のイヴェルドン版の記述に共通する。『百科全書』の記述は 1770 年代から次第に重農主義的な記述になっていたといえるのだ。

そしてさらにサヴァリの記述が続くのだが、その前に以下の文面が挿入されている：

以下の論はサヴァリの辞典からの引用であり、同時代の人々によってコピーされてきたものだが、先の誤謬の証拠になっている[32)]。

サヴァリの記述は誤謬例として『百科全書』に利用されるようになり、引用そのものが、『商業総合辞典』を批判するために用いられていることがわかる。だが、引用の効果はそれだけではない。『体系的百科全書』が文字どおり『百科全書』の後続辞典である以上、サヴァリの記述を皮肉として用いながら、直接言及することなくフォルボネの記述を削除することにも成功しているのだ。つまり『体系的百科全書』において、その双方の源流は命脈を絶たれ、重商主義的な性格から重農主義的な記述へと書き換えられていたのである。

おわりに

ここまで『商業総合辞典』の項目「商業」を出発点として、18 世紀前半から後半にかけての受容を追跡することにより、辞典の記述を舞台とする重商主義と重農主義の対立と移行を確認してきた。本論ではいかにして『百科全書』の系譜と『商業総合辞典』系譜とが交錯して、その時々で互いを利用しあいながら項目記述が更新されたのか、その一端を明らかにできた。また

32）*Encyclopédie Méthodique*, Paris et Lyon, 1783, T. 1, p. 538b.

その背景にある出版上の競合関係についても、他辞典の記述を巻き込んで展開した国境を超える利害関係が、辞典の記述に影響を与えていたといえるだろう。